

光 文 社 時 代 小 説 文

弥太郎笠

し も ざわ かん
傑作時代小説 子母沢 寛





光文社文庫

傑作時代小説

弥 太 郎 笠

著 者 ^し子 ^も母 ^{ざわ}沢 ^{かん}寛

1988年11月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫
印 刷 豊 国 印 刷
製 本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Kan Shimosawa 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70846-3 Printed in Japan

光文社文庫

傑作時代小説

や た ろう がき
弥 太 郎 笠

し も ぎわ かん
子母沢 寛

光 文 社

目次

弥太郎笠

5

次郎太川止め

161

あばれ行燈

195

紋三郎の秀

225

さんど笠

243

解説

磯貝勝太郎
いそがいかつたろう

265

弥太郎笠

井戸端

森を突抜けると道が二た股になった。

手前を立て切つて、さらさらと珠を洗うような小川。朽ちかけた板橋がかかつて、橋の袂に大きな椎の木。その下に、右松井田宿、左安中宿と、みちしるべの棒杭が建っている。

通り名が、り、やんこの弥太郎。振分けの荷物を肩に、粋な単衣の腕をまくつて、三度笠を左手に、頭に甕覗きの手拭を、水に浸して載せている。縦から見ても横から見ても、跳ねッ返りそうな小気のきいたやくざ渡世の旅鳥、左の額から眉へかけて、三日月形の細い傷痕が一つある。

速い足だが、橋を渡ると、草鞋がびたり止った。

「さア、どっちへ行くね」

弥太郎、自分で自分へ、きいた。

「どっちでもいいよ」

「そいつア困る」

「ではいつもの通り辻占で行こう」

「よかろう」

頬へ小さな笑いを浮べて、ちよつとあたりを見たが、

「流れの雑魚ア、上か下か」

「登りやア安中、下りやア松井田」

綺麗な水だ。底の小石が浮かび出るように光っている。弥太郎、流れを見詰めて真面目な顔附。

小石の間を黒い小魚が、矢のようにちらりと、上から下へ――。

「ようし、定まった。松井田だ」

呟いたと思うと、二度と振向きもせず、さつきと道を右手にとっている。真ッ正面には妙義の山が、むらさき色にそそり立っている。朝からのじりじり照り、四ツを廻つて、少しばかり楽になったようだ。

次の朝――また暑い。

上州松井田宿の貸元虎太郎の、枝垂柳の延びている裏手の井戸端で凍るような水を汲んで、ざぶざぶと顔を洗っているのは、昨宵草鞋をぬいだ客人の弥太郎。掬った水が指の間から銀の小粒のようにはらはらと散つて、それへ朝日がきらきらする。二年この方、榛名の裾づたいにぶらぶらしているの、妙義のお山も、物珍らしくはなかったが、苦勞人の虎太郎が、痒いところに手の届くような旅人親切に、さすがに今朝はいい氣持だ。

うしろで小さな下駄の音がした。弥太郎ひよいと振り返ると、手桶を下げて、立っているのが、虎太郎の一人娘お雪。ゆうべ、旅鳥などには思いも寄らず、貸元とお膳をならべておまんまを頂いて、あまり飲けないがお酒も出た。その時に、名前も聞いたし、一粒種とも知った訳だ。「おや、十八におんななさいますか。あッしの妹もあッしとは六つ違いの丁度十八、何んとなくおなつかしゅうござんす」

そんなこともいったッけが――。弥太郎少し泡を食って、

「ご免なさんせ」

流し場を横へ避けて、

「あッしが汲みますでござんす」

お雪の手桶へ手をかけて、引取ろうとしたが、お雪、渡さない。

「いいえ。勿体ない、水仕事は女の業でございますよ」

「でも」

「いいえ、いいのです」

「でもねえ、あんさんの水仕事を、厄介もんのあッしが、ぼんやりと眺めている訳にやア参りません。一杯だけでも汲ませてやっておくんなさい」

「父親が申しました。あなたはただの旅人さんではございません。お客様だ大切にしろと申しました」

「そりやアまたなぜ？」

「なぜでもよござんす、おほほほ……」

手の甲を口に当てて笑った顔、黒目勝ちでぱっちりとしたこぼれるような愛嬌のある眼附だ。弥太郎何んだか、胸がどきーんとした。

「はッはッはッはッ……困りましたねえ。こうなりやア是が非でも、一桶汲ませておくんなさい」

「いけません。ほほほ……」

弥太郎、手桶を取ろうとした手を、お雪が払いのけようとした。自然びつしやり手と手が触つて、

「あら」

お雪、さつと眼のふちが紅い。それでも弥太郎とうとう桶をとって、ぎアーぎアーと二釣瓶。水がこぼれた。

「勿体ない」

お雪が真面目でつぶやいた。

「御直参の若殿さまが——」

聞き咎めた弥太郎。

「おツと待った。昔は昔、今は今、やくざ、渡世の白無垢鉄火、親分なしのしがねえ渡り鳥だ、

ゆうべはこちらの親分さんが、あんまりしんみりお目をかけて下さるんで、失礼さんだが、何んだかこう、おやじにあつたような気がしやして、江戸の昔の物語、自慢たらしく素姓すじやうも割つたが、今となつちゃアお恥かしい、ゆうべのこたア水に流して、お忘れなすつておくんなさいやし」

お雪はただ黙って、ちらりと弥太郎の顔を盗み見ただけであつた。

井戸端の枝垂柳の間を、雀が一つ、縫って飛んだ。

四 日 目 の 朝

一宿一飯いっしゅくいっぱん、江戸の屋敷を出てからは、同じ屋根の下には、滅多に二た夜と羽翼はがいを休めない弥太郎、ここばかりはどう気が向いたか、もう三日目も夕方になっている。虎太郎の親切も何よりだが、お恥かしいが弥太さん、実アお雪に心をひかれてゐるほうが大きいようだ。

江戸以来の旅から旅。女は飽きる程見ても来たが、こうした娘の内輪にちらちら見せる本当の女心の底の底。渡り鳥奴う、柄にもなく羽交はが締めにあつた形。その日もだんだん暮れかけて来る。裏に出て、妙義みょうぎに映る夕映ゆふばえの空を眺めながら、柳の木の下にぼんやり立ったものだ。雀が飛んで行く、鳥が飛んで行く。竿へかかった洗濯物に静かな風が当る。

「惚れたのか？」

「笑わせるな、惚れなんぞするものか、この俺が」

「では発たてよ」

「発たなくつてよ」

「だが、お雪さんはてめえに思おも召めしがあるようだな」

「冗談いうねえ、俺が来てまだ三日目だぜ」

「三日が一日だつて、惚れるものア惚れるよ。本当だよ」

「そうかなア。素人の娘にしちやア少し浮気だなア」

「馬鹿いうな。ちらりと見てちらりと惚れるところが素人の娘だ。てめえも憎くアねえだろ
う」

「そりやアそうだな」

「では矢張り手前も惚れたんだな」

「ば、ば、馬鹿、惚れなんぞするものか」

「では発たつか」

「発つともな」

弥太郎胸の中が妙にわくわくして堪らない。柳の幹へ背中を持たせて、うつとりしている。
裏の細道を伝つて、こっちへやつて来る細こまかい足音がした。うತ್ತりしていただに、弥太
郎少しびっくりして、ひよいと見ると、二十八、九の、すらりとしたいい女だ。

「今晚は？ 親分さんは？」

「へえ、いらつしやいます」

弥太、答えた。

「有難う」

女は、一寸頭を下げたまんま、弥太郎の前を通つて二、三歩行つたが、振り返りながら流し目で、

「お前さん旅人さんですね？」

「へえ、厄介もンでござんす」

「あたしアねえ」

「へえ」

「親分の……」

といつて、左の手を自分の白い顔の左の頬のところへ上げて、小指を見せて、

「これさ」

にッこりした。

「へえ」

少し呑まれた形だ。

「この先の桔梗屋ききやうやという料理茶屋、あれをやっていますのさ。晩にでも遊びにお出でな、姐ねえ

さんといつてもわかるし、お牧まきといつてもわかりますよ」

「へえ」

「江戸だねえ？」

「へえ」

一寸戻りかけて、

「きつと遊びにお出でな」

妙にこつてりした色気を見せて、そのまま行つた。

「何んでえ、野郎少し足りねえな。あれが親分のいろかねえ。あきれたもんだ」

——尤もつともお雪さんのおふくろさんは五年前に亡くなつたと昨夜ゆうべも聞いた。それにしてもあんな女では、どうせ親分を食い物にしているんだろうが、万に一つ惻わづ巧なな親分でも迷いが出て、あの女を本妻に直すの何んのツてことになったら、こりゃアお雪さんが泣きを見るな、可哀そうに——弥太郎、妙に心配になり出した。

女中が勝手口から、洗い物を取入れに出て来た。弥太郎心づけをしているので、きのうは下帯を洗つてくれた。

「ねえさん、お客さんだね」

「はい——お客様はお客様だかの——」

「親分のお妾だね」

「よくわかりましたのう。親分のお妾だか何んだか知んねえが、江戸から流れ込んで来た大した女でがすよ」

「江戸者か？」

「元は芸者での、今は家の親分のお世話になつて毎月莫大もねえお金貰つてるだが、あの女のためにこれまで首をくくつた男が三人もあるというぐらいですよ。家の親分さん何んにも知んねえけれど、何んでもこのごろア安中のお神樂の親分さんともくつついているちゅう噂でがんです——」

ここまですつたが、それつ切り口をつぐんでしまった。弥太郎、

「え！ 安中のお神樂の大八と」

「——」

女も黙つてうなずいて見せただけだし、弥太郎も急に氣をかえたようにしていやな話で、もう続きを聞きたくなかつたのか、

「そうかなア」

いいながら、家の横手の細い草道を、ぶらりぶらりと、掻き分けるようにして歩き出した。おかしな奴は弥太郎で、その晩、どういふ風が吹き廻したものか、小ざつぱりした浴衣がけで、忍ぶように桔梗屋へ出かけたものだ。

お牧すつかり悦に入つて、奥座敷へ引張り込むと、さア大変だ。それをいいことに、弥太、